

ブラジル日本移民110周年記念及び ブラジル鳥取県人会創立65周年記念

鳥取県議会訪問団 報告書

【平成30年7月19日（木）～27日（金）】

鳥 取 県 議 会

1 訪問日程及び訪問先

平成30年7月19日（木）から27日（金）まで

ブラジル連邦共和国サンパウロ州 詳細は「4 主な訪問日程」のとおり

2 訪問団メンバー

(1) 鳥取県議団

福間裕隆副議長、内田博長議員、藤井一博議員 事務局：藤島課長補佐

(2) 鳥取県行政団

岡村整諮統轄監、足羽英樹教育次長 交流推進課：遠藤課長、田嶋主事

(3) その他

鳥取市団（深澤市長、下村市議会議長ほか）、あすなる会（浜崎顧問ほか）、
鳥取ブラジル友好協会（田邊会長ほか）、中堅リーダー交流事業派遣職員

3 訪伯の概要及び所感

今回の県議会によるブラジル訪問は、日本人のブラジル移住110周年やブラジル鳥取県人会の創立65周年等を祝賀するとともに、海外移住の歴史的意義の再確認及びブラジルとの交流の一層の深化を図ることを目的として行ったものである（ブラジル連邦共和国の国勢等は3ページ参照）。

まず、ブラジル日本移民110周年記念祭典であるが、1908年に日本人移民が初めてブラジル連邦共和国サンパウロ州にあるサントス港に到着し、それから110周年を迎えるのを記念して催されたものである（日本移民の概要は4ページ参照）。日本からは秋篠宮眞子内親王殿下並びに18県の知事又は議長等が出席し、本県からは福間副議長が壇上に上がって祭典を祝賀した。当日の眞子内親王殿下のお召し物は鶯色の着物で、日本文化や伝統をさりげなくPRしたその姿は式典を一層華やかなものにした。

式典会場では在ブラジルの各都道府県県人会が中心となって日本各地域の伝統芸能が披露されたが、本県のものとしては「しゃんしゃん傘踊り」が披露され、この踊り手にブラジル鳥取県人会会員及び大志万学園の生徒達のほか本県訪問団も参加し、総勢約170名が鈴の音を響かせ会場を盛り上げた。

次に、ブラジル鳥取県人会創立65周年記念式典に出席した（ブラジル鳥取県人会の概要は4ページ参照）。ブラジル鳥取県人会は、1952年に鳥取市で発生した鳥取大火の救援募金運動をきっかけとして設立され、昨年が創立65周年にあたる年であったが、ブラジル日本移民110周年記念祭典の開催年である今年に繰り延べして催されたものである。この記念式典においては、本県訪問団の主だったメンバーが壇上に上がって祝賀するとともに、この式典の場をお借りして、80才以上の県人会会員の方の功績を表彰させていただいたり、更なる相互交流の発展を祈念して記念品の贈呈等を行った。

上記二つの記念式典に加えて、サンパウロ市から第二アリアンサ鳥取村までの行程途上にあるプロミソンに立ち寄って、プロミソン上塚植民地100周年記念式典にも出席した。この式典は、日本人移民の父と言われている上塚周平（うえつか しゅうへい）氏がプロミソンに入植地を開設してから100周年を迎えるのを記念して催されたもの

で、ブラジル鳥取県人会の方と共にしゃんしゃん傘踊りを披露してこの式典を祝賀した。

これら3つの記念式典への出席のほか、1926年に鳥取県海外協会と信濃海外協会が両県からの移住者のために購入したことに始まる第二アリアンサ鳥取村の訪問や、この第二アリアンサ鳥取村を行政区内に所管するミランドポリス市及び市議会の訪問、日本移民開拓先没者慰霊碑の参拝、ブラジル日本移民史料館の視察、大志万学院（日本語が廃れると日本文化も廃れるとの危機感から、第1外国語に日本語を採用したブラジル教育制度下の私立学校）の視察、日本文化等の新しい発信拠点であるジャパン・ハウスの視察を行い、海外移住の歴史的意義の再確認や相互交流の深化を図った。

さらに、本県に関係のある日系企業等を訪問し、本県とブラジルとの経済的交流の拡大可能性の確認等を行った。なお、今回訪問した日系企業は、ダイキン・マッケイ・ブラジル社（当県に企業研修施設ダイキンアレス青谷を構えるダイキン工業のブラジルでの拠点）、ブラジル三井住友銀行、TGK社（日本への人材派遣や旅行業を行っている会社）の3社で、ブラジル三井住友銀行とTGK社については、会長が本県出身の株式会社武蔵野（本社：埼玉県、主な事業：弁当、おにぎり等の製造・販売、ホテル事業等、売上高：1271億円（2016年3月期）、従業員数：9450名）から御紹介いただいたものである。

以上がブラジル訪問の主な行事の概要であるが、これら全日程を通じて強く感じられたことは、日系人の方は、日本や出身県について又は自らのルーツについて自己の確立の上で強く意識し、誇りとして非常に大切にされているということである。また、こうした意識や姿勢を次の世代に引き継いでいくため、日本語学校といった教育機関の確保や県人会での文化教養活動の実施など様々に努力をされているということである。このような姿に接して、鳥取県で暮らす私達は、日系人の方が思いを寄せる故郷の美しさ、素晴らしさを守れているのか、生まれ育った地域の良さに気付かないままではないのか、日系人の方が寄せる思いにも応えられる地域づくりをしているのだろうか、このような思いを常に抱きながらの旅となった。

ブラジル連邦共和国の日系社会は海外最大のもので、日系人総数は約160万人と推定されている。連邦下院議員、州議会議員、市長等をはじめ政治、経済、文化芸術等の多様な分野で活躍されており、日系人全般に対する社会的評価も高い。この度の企業訪問先3社全てにおいても、日系人や日本人が高く評価されているということが話題に上った。

一方で、在サンパウロ日本国総領事館のホームページによれば、日系人世代別の混血状況について、2世が6%、3世が42%、4世が63%と、世代を重ねるごとに混血の割合も高くなっている。こうした状況も相まって、家庭でも日本語を使う機会がほとんどなくなるなど、高齢の方を中心に日本とのつながりの希薄化に危機感を持つ方も多いと聞く。

今回訪問した第二アリアンサ鳥取村においても、日本語学校に通う生徒の親の世代（3世）は既に日本語能力に自信のない方が多く、このままでは日本語や日本文化が村からなくなるのではないかという危機感から村の日本語学校に通わせる保護者も多いということであった。

日系社会の中から日本語や日本文化が失われ、日本的な良さも併せて失われることになれば、これまでの努力により獲得してこられたブラジル社会での日系人に対する高い

評価もまた変化してくるかもしれない。このことの是非は分からないが、少なくとも日系人又は日本人に対する社会的信用がなくなることになれば、日伯双方にとって余りよいこととは思われない。こういうことも日系社会において日本語や日本文化の継承に努力されている理由の一つと思われるが、次の世代の日系人の方にとっても魅力的で誇りとなり得る、そして自ら日本語や日本文化を学ぼうという意欲を持っていただけるような日本・鳥取県であるよう、まずは私達自身が一層地域を磨いていく必要がある。

また、日本語や日本文化を次の世代に継承するために日々努力されているブラジルの同胞の思いに応えるために、引き続きその努力の支援にも取り組んでいかなければならない。そして、先人に残していただいた貴重な財産である日系人や日本人に対する評価の高さを強みとして、経済的な交流の拡大にも積極的に挑戦することで、交流の裾野を広げながら新たな好評価を獲得し、これを日伯交流の好循環につなげていかなければならないと強く感じたところである。

<参考：ブラジル連邦共和国の概要：出典（外務省HP他）>

項目	概要
位置等	南半球に位置し、南アメリカ大陸の東側にある。日本からは、直線にして約1万7千km離れており、サンパウロ州とは12時間の時差がある。 今回の訪伯の場合：フライト総時間約24時間、乗り継ぎ時間も含む移動総時間約30時間
面積	851.2万平方キロメートル（日本の約22.5倍）世界第5位
人口	約2億930万人（世銀、2017年）世界第5位
民族	欧州系（約48%）、アフリカ系（約8%）、東洋系（約1.1%）、混血（約43%）、先住民（約0.4%）（ブラジル地理統計院、2010年）
日系人	推計160万人（0.7%）うちサンパウロ州在住 約100万人
言語	ポルトガル語
経済	GDP（名目）：2兆560億米ドル（日本：4兆8720億米ドル）（2017年、世銀） 一人当たりGDP（名目）：9,821米ドル（日本：38,440米ドル）（2017年、世銀） 世界第9位かつ南米最大の経済規模を誇る。2016年の経済成長率はマイナス3.5%で、2017年はプラス1.0%。（ブラジル地理統計院）。ブラジルは潤沢な外貨準備高（2018年5月時点で3,825億ドル）を有する対外純債権国となっている。
主要産業	製造業、鉱業（鉄鉱石他）、農牧業（砂糖、オレンジ、コーヒー、大豆他）

<参考：サンパウロ州の概要：出典（在サンパウロ日本国総領事館HP等）>

項目	概要
面積	248,219.6km ² （鳥取県の約70倍）、ブラジル全土の約3%に該当。
人口	約4,509万人（うち州都サンパウロ市約1200万人）※2017年推定
気候	亜熱帯及び温帯に属し、年間平均気温（17～22℃）。訪伯した7月は冬にあたり、平均気温17℃（最高29、最低9℃）。「一日のうちに四季がある」と言われ、気温の変化が複雑。
主要産業	ブラジルにおける工業・商業・金融の中心地で、そのGDPはブラジル全体の31%。オレンジジュースを始めとする果実やサトウキビやコーヒーの生産量でも国内上位にある。

<参考：プロミソン市の概要：出典（ニッケイ新聞HP、世界地名大辞典ほか）>

項目	概要
面積	782km ² （鳥取市（765km ² ）とほぼ同じ広さ）
地勢	サンパウロ市から西北に約500km弱内陸に入った、標高420mの高原地帯。
人口	約4万人
主要産業	サトウキビ、トウモロコシ等の農業、酪農

<参考：ミランドポリス市の概要：出典（県交流推進課調べ）>

項目	概要
面積	920 km ² （本県中部地域(903 km ²)とほぼ同じ広さ）
地勢	サンパウロ市から西北西に約 600 km内陸に入った、標高 400 ～ 500 mの高原地帯。
人口	約 2 万 6 千人
主要産業	酪農（肉牛、乳牛）、養鶏、養蚕、米作、コーヒー、トウモロコシ、果樹などの農業

<参考：日本人移民の概要>

◇日本移民の数：出典（日本出移民の歴史地理学的研究 石川友紀著、県交流推進課調べ）

	戦前 (～ 1940 年)	戦後 (1952 ～ 86 年)	合計
日本移民全体	202,514 人	53,489 人	256,003 人
うち鳥取県からの移民	2,000 人	300 人	2,300 人

◇日本人移民訪伯の契機と経過（出典：ブラジル日本移民の軌跡、丸山浩明著）

日本の海外移民史は、1868 年（明治元年）にサトウキビ農園労働者としてグアム島やハワイに渡った集団出稼ぎ移民から始まる。この背景には、富国強兵による重税で困窮し、日本の都市部にすら職を得られなかった貧困農民の海外逃避の現実があった。

20 世紀に入り、日本移民の大量流入により職を奪われた者による北米やカナダでの日本人排斥運動の展開を背景に、これらの国への移住は著しく制限されるようになった。こうした中で、コーヒーの国際市場の大暴落により労働力不足に陥ったブラジル政府等から日本へ移民誘致があり、ブラジル移住が脚光を浴びるようになった。そして、1908 年に、初めての日本人移民を乗せた笠戸丸がブラジルのサントス港に入港し、ブラジルでの日本人移民の歴史が始まる。

当初の日本人移民はコーヒー農園労働者としての出稼ぎが目的で、短期的に収益を上げて日本に帰国する予定であったが、実際は収益は得られず赤字となり、帰国すらままならない中で、生き残りを賭けて独立農へと転身し、中長期的な出稼ぎ戦略で帰国を実現しようとした。その後、アリアンサの成功などを背景に日本政府による移民が推進されるが、ブラジルのナショナリズムの高揚により日本人排斥運動が展開され、さらに、第 2 次世界大戦勃発後の日米開戦によるブラジルとの国交断絶を契機として日本からの移民は一時途絶えることになる。しかし、戦後、戦地からの多くの復員兵や引揚者の帰国による混乱を收拾するために、ブラジルとの国交回復後の 1952 年からブラジル移住が再開された。これも 1959 年の 7041 人をピークに日本の高度成長を背景として減り続け、1993 年（平成 5 年）の 10 人で日本からの移住は終了した。

<参考：ブラジル鳥取県人会の概要：出展（県交流推進課調べ）>

◇設立 昭和 27 年（1952 年）

（経緯） この年に発生した鳥取大火の救援募金運動を契機とする。

（義捐金） 1, 5 8 9 千円

* 消費者物価指数 昭和 30 年：平成 28 年＝ 1.0 : 5.9

◇所在地 サンパウロ市（県人会館を拠点に活動）

◇会員数 約 250 家族

◇会長 山添源二（やまぞえ げんじ）平成 29 年 2 月～

- ◇活動状況
- ・各種記念行事、会合、催し物等の開催
 - ・鳥取県との各種交流事業（留学生、研修員制度等）の実施
 - ・日本語講座、傘踊り、俳句等日本文化教養講座の開催 等

◇県人会館（正式名称：ブラジルー鳥取交流センター）の管理・運営

・竣工 平成 7 年 11 月（敷地 841 m²、建物 858 m²（地上 2 階、地下 1 階））

・事業費 80,078 千円（県 50,000 千円、（財）市町村振興協会 25,000 千円、ブラジル鳥取県人会 5,079 千円）

<参考：第二アリアンサ鳥取村：出典（県交流推進課調べ）他>

◇現在の世帯数

約30世帯 約140人（うち鳥取県関係2世帯4人）

◇移住経緯 出典（ブラジル・アリアンサ移住地の歴史、渡辺伸勝著ほか）

1908年の最初の日本人移民は短期的な稼ぎを目的として渡伯したものの収益が上がらなかったことから、1920年代から渡伯方針を変更して自立的な農業経営を目指して日本人集団地を建設するようになったが、アリアンサ建設もこの頃の一つ。

アリアンサ建設は、苦学生救済を目的とするキリスト教組織「力行会」の永田稔（ながた しげし）会長を中心に進められた。当時、力行会は国際感覚を身に付けた人材が日本の近代化に不可欠として海外留学や移住支援事業を行っていたが、1908年に日本人排斥運動を背景とした日米間での紳士協定が締結されたことから、北米への移住を自粛せざるをえなくなった。そこで、力行会が次なる移住先として目を付けたのがブラジルであった。力行会永田会長による移住計画では、①出稼ぎ目的ではなく、理想社会の建設を目指した定住・移住の実現、②経営母体は営利を目的とせず、移住者の保護と生活環境整備を優先、③移住地の収益はそのまま移住者に還元分配、といった理念が掲げられ、その移住地には、移住者による自立とブラジル社会との共生を目指すところとして、ポルトガル語で「親和、協調、提携、協同」を意味する「アリアンサ」という名前が付けられた。

アリアンサ建設は、永田会長の出身地である長野県の支援を得て進められ、1924年に第一アリアンサが建設された。この流れが鳥取県と富山県にも波及し、1926年に鳥取県海外協会が3000町歩の土地を購入して、信濃海外協会とともに第二アリアンサを建設し今日に至っている。

◇第二アリアンサ鳥取村日本語学校

鳥取村の子弟の日本語教育を行うための私塾的な学習の場として鳥取村に設けられた学校である。1世の方が日本語教師を務めていたが、高齢化による確保困難を背景に、1993年にブラジル鳥取県人会長から鳥取県知事へ日本語教師派遣の要請があり、1994年以降、本県から13名の教師を派遣している。

現在派遣されている井上幹朗（いのうえ みきお）先生は、県立境港総合技術高校の社会科教諭をされていた方で、今年5月から2020年3月までの任期で頑張っていた。この度の訪問でお会いした際には、すっかり現地に溶け込み、確実な日本語や日本文化の伝承等に向けて、単なる日本語教師という枠を超えての活躍をされていた。

4 主な訪問日程

月 日	行 程	
7 / 19 (木)	08:45 (40) ~ 14:00 ~ 19:30 ~ 23:30 ~	鳥取 (米子) 空港 ⇒ 羽田空港 羽田空港 ⇒ シャルルドゴール空港 (パリ) 飛行時間 12 時 50 分 乗り継ぎ (4 時間) シャルルドゴール空港 ⇒ ガアルリヨス空港 (サンパウロ) 飛行時間 12 時間 【機内泊】
7 / 20 (金)	07:30 ~ 09:00 ~ 13:00 ~ 14:00 14:40 ~ 15:10 15:50 ~ 16:50 18:00 ~ 20:00	ガアルリヨス空港 ⇒ ブルーツリーパウリスタホテル (サンパウロ) 【ホテルで休息】 ダイキン・マッケイ・ブラジル社訪問 日本移民開拓先没者慰霊碑参拝 ブラジル日本移民史料館視察 日本祭り視察 【サンパウロ州サンパウロ市泊】
7 / 21 (土)	11:00 ~ 13:30 15:00 ~ 17:00	ブラジル日本移民 110 周年記念祭典出席 マーケット等視察 【サンパウロ州サンパウロ市泊】
7 / 22 (日)	08:00 ~ 15:00 15:00 ~ 21:00	サンパウロ市 ⇒ プロミソン市 車移動 プロミソン上塚植民地 100 周年記念式典出席 【サンパウロ州アラサツバ市泊】
7 / 23 (月)	09:00 ~ 13:00 14:30 ~ 18:00 18:00 ~ 20:00	ミランドポリス市長、市議会議長訪問 第二アリアンサ鳥取村訪問 (日本語学校特別授業、共同墓地参拝等) 第二アリアンサ鳥取村歓迎夕食会 【サンパウロ州アラサツバ市泊】
7 / 24 (火)	05:35 ~ 10:30 ~ 11:30 15:30 ~ 16:30 18:00 ~ 21:00	アラサツバ空港 ⇒ ヴィラコポス空港 飛行時間 1 時間 15 分 大志万学院 (松柏学園) 訪問 ジャパン・ハウス視察 ブラジル鳥取県人会創立 65 周年記念式典出席 【サンパウロ州サンパウロ市泊】
7 / 25 (水)	09:00 ~ 10:00 10:15 ~ 11:00 15:10 ~	ブラジル三井住友銀行訪問 TGK社訪問 ガアルリヨス空港 ⇒ シャルルドゴール空港 飛行時間 11 時間 20 分 【機内泊】
7 / 26 (木)	07:30 ~ 13:35 ~	乗り継ぎ (6 時間) シャルルドゴール空港 ⇒ 成田空港 飛行時間 11 時間 55 分 【機内泊】
7 / 27 (金)	10:15 ~ 11:20 13:05 (14:55) ~	成田空港 ⇒ 羽田空港 バス移動 羽田空港 ⇒ 鳥取 (米子) 空港

5 主な訪問結果

(1) ダイキン・マッケイ・ブラジル社訪問【20日13:00～】

ダイキン・マッケイ・ブラジル社（＝ダイキン・ブラジル社）は、ダイキン工業株式会社（本社：大阪府、主な事業：空調・冷凍機の製造販売、年間売上高2兆2千9百億円（29年度）、海外連結子会社241社70,263名）のブラジル連邦共和国での営業拠点であるが、ダイキン工業の研修施設であるダイキンアレス青谷が鳥取市青谷町に設置されている縁で企業訪問が実現したものである。

当日は三木取締役社長のほか、企画担当の師岡氏や技術担当の川村氏からダイキン工業の概要、海外展開の状況、人材育成の取組状況、主力商品の概要などのほか企業成長に向けた取組等について御紹介いただいた。



三木取締役社長（左）、企画担当の師岡氏（右）



岡村統轄監からの挨拶

ダイキン工業は、1993年から急成長し世界展開を遂げているが、これは次の4つの理由による。

- ①他社が家庭用の空調機器に重点を置く中で、産業用、家庭用、業務用の3本柱に重点をおいて事業展開を行ったこと
- ②空調専門メーカーとして「省エネ」をキーワードに売り込みを行ったこと
- ③「二流の戦略であっても一流の行動力」を会社方針として活動してきたこと
- ④他社に半歩先んじて成長し、技術力で空調業界を牽引していくことを目標としていること

そして、これらの取組を支えているのが独自の人材育成方法にある。

ダイキン工業は、必要な人材の確保について、単なる穴埋め的な補充を行うのではなく、現地において人材を育成し、また、こうして育成した各海外拠点における技術者をダイキンアレス青谷に集め、ダイキン・オリンピックという形式により現地で磨いてきた技術力を競わせることにより、ダイキン工業グループ全体の更なる技術力の向上を図っている。こうした姿勢はダイキン・ブラジル社においても徹底されており、2011年の開設当初から現地の ESCOLA SENAI という職業専門学校とタイアップして、ダイキンの社員以外も生徒として受け入れて技術研修を実施しており、これまでに延べ6000名の技術者が受講してきた。こうした取組による技術力がダイキン・ブラジル社のブランド力となり、更なる事業展開を目指すラテンアメリカにおける推進力となっている。

現地の特性を理解した上で現地で技術者を育成し、そして日本の基準によりその能

力を更に向上させ、こうして得た技術力の裏付けによりブランド力を高めて世界に展開してくという方法については、本県の今後の人材育成に係る取組において大いに参考とすべきであろう。

なお、日系人の採用については、その評価が高すぎて他社との獲得競争が厳しく、採用したくてもなかなか難しい状況とのこと。この点については、ブラジル鳥取県人会との連携など工夫の余地があるのではないかと感じた。



ショールーム見学



ダイキン・ブルーの天井

(2) 日本移民開拓先没者慰霊碑参拝【20日14:40～】

ブラジル日本都道府県人会連合会の川合昭副会長にご案内いただき、サンパウロ市イビラプエラ公園内にある日本移民開拓先没者慰霊碑を参拝した。



慰霊碑



慰霊碑に参拝

現在では、ブラジル社会のあらゆる分野で日系の方が活躍されているが、移住当初は、移民募集時にあった説明の1/5にも達しない収益しか得られない中で過酷な労働を強いられるなど、苦難の歴史の上に成り立っている。幼い子どもたちを中心に初期開拓移民の多くが劣悪な生活環境の中で倒れ、荒れ果てた無縁墓地で祀る人もないまま眠っていることに心を痛めた日本海外移住家族会連合会の故・藤川辰雄事務局長らが中心となって慰霊碑の建立の呼びかけが行われた。そして、1975年の建立以来、天皇皇后両陛下をはじめ、内閣総理大臣などの政府関係者、各都道府県訪問団、一般訪伯団が多数参拝に訪れている。

なお、最初の移民を乗せて神戸港を出港した笠戸丸が1908年6月18日にサントス港に入港したことにちなみ、毎年6月18日を「移民の日」としているが、この日に執り行われる慰霊碑参拝は、現在では欠くことのできないブラジル日系社会の公式行事となっている。

今回も訪問団一同で慰霊碑に献花し、先没者の辛苦に対して哀悼の誠を捧げた後、慰霊碑礎石の下にある先駆移民の御霊を合祀した霊廟に入り、祭られた平和慈母観世音菩薩木像と地藏尊を前に焼香し、冥福をお祈りした。最後に、訪問団員それぞれが思いを込めて記帳を行った。

(3) ブラジル移民史料館視察【20日15:50～】

サンパウロ市内の日伯文化協会ビルの7～9階にあるブラジル日本移民史料館は、日本移民が残した当時の記録書類や物品などを基に、当時の日本移民の生活や社会背景等を今に伝える施設である。1978年の移民70周年を記念して開館したもので、文書類2万8千点、展示物品5千点、写真1万点が収蔵展示されてる。

7階展示場には、1895年の日伯国交樹立から移民受入のための制度・枠組みが定められる間の資料が展示されている。移住初期は、コーヒーの国際市場の大暴落によりコーヒー農園で働くイタリア移民が半減したことに伴う深刻な労働力不足を補うために、北米等の移民実績で評価の高かった日本人が迎え入れられた。ただ、そういう不況下にあるブラジルにおいては宣伝されたとおりの収益が得られず、借金を重ねて渡伯したものの更に借金が膨らみ、帰国することすらままならない中で生き残りを賭けてブラジル奥地に土地を確保し独立農となったという。開拓小屋が館内に再現されていたが、当時の辛苦は私達の想像を遙かに超えるものであったに違いない。

ただ、独立農後の日本人移民による村づくり（植民地（コロニア））においては、日本語教育や日本の生活習慣が確保され、また、相撲、柔道、剣道などの大会も催されており、過酷な状況下においても次のステップを見据えたその前向きな生き様やたくましさに驚嘆させられた。



再現された開拓小屋



当時の柔道着等

8階展示場は「日本移民の貢献」「ブラジルと日本が対立した第二次世界大戦」「戦

後直後のブラジルにおける日系社会の再編成」の3つのテーマによって構成されているようであるが、当日は改装工事中で見ることができなかった。

9階展示場は、戦後の日本移民50年の歩みや音楽・舞踊・文学等の各分野での日伯交流について展示されていた。戦中はブラジル社会からの敵性国人として排斥を受け、終戦後は日系人同士で日本が戦争に勝った・負けたと抗争を繰り返し、ブラジル社会の秩序を乱す厄介者として排斥された歴史があったが、その後、日本移民50周年やサンパウロ市創立400周年を契機として日系人の日本人としての再統合が図られるとともに、1970年代のブラジルの高度経済成長期が相まって日系企業のブラジル進出が促されたことなどにより、現在のブラジル社会での評価の獲得や社会・経済的地位の向上へとつながったようである。

史料館を訪ねてこうした日本人移民の歴史を知り、追体験をすることで、ブラジル社会において日系人がふるさとや日本語、日本文化及びこれらとつながるルーツを大切にしてきたことの意味について、改めて考えさせられた。



ブラジル鳥取県人会本橋名誉会長から説明を受ける訪問団

(4) 日本祭り（フェスティバル・ド・ジャポン）視察【20日18:00～】

この祭りは、食や芸能等を通じて日本文化をブラジル社会に普及する目的で開催され、1998年の第1回以降、今年で21回目となる。サンパウロ州の年間観光カレンダーに組み込まれ、サンパウロ市の公式行事としても2004年以降認定を受けている。主催はブラジル都道府県人会連合会で、ブラジル鳥取県人会の本橋幹久名誉会長が連合会会長を務めている期間（2014～16年）に日本政府の協力・支援も獲得し、3日間の祭り期間中に約20万人が来場するまでになっている。

今回の祭りもブラジル日本移民110周年記念祭典を同会場で開催したこともあり、報道によれば約21万人の来場者があったとのこと。視察を行った時間帯が18時以降と遅かったにも関わらず、引っぱりなしに来場者があり、この祭りや日本文化等に対する認知度や関心の高さが伺われた。

祭りの会場には、46都道府県の県人会がブースを出店し、それぞれの郷土料理や日本を連想させるブラジルで人気の食べ物（ラーメン、ぎょうざ等）が売り出されていた。ブラジル鳥取県人会のブースでは、和牛肉の牛丼と大山おこわをメインに、あ

んぼ柿、ドライマンゴー、ドライ柿などが売り出されていたが、大山おこわやあんぼ柿などは、中堅リーダー交流事業を活用して来県した研修生が調理研究を重ねているだけに、本格的な味わいであった。



ブラジル鳥取県人会のブース



大山おこわ

同時に、会場内では折り鶴や書道体験、日本車展示など色々なコーナーが設けられ、様々なイベントが繰り広げられていたが、中でも日本のアニメやゲームのキャラクターに扮するコスプレ大会は優勝者に日本旅行が用意されるなど、大変な人気を博しているとのことであった。本県はマンガ王国を推進し、また、倉吉にはフィギュア博物館がオープンするなど魅力的な資源を擁しており、今後のブラジルとの交流において、こういった方面からのアプローチも面白いと感じた。



多くの人で埋め尽くされた会場



たこ揚げを披露する人

(5) ブラジル日本移民110周年記念祭典出席【21日11:00～】

最初の日本人移民781人をのせた笠戸丸が52日間の航海を終えて、ブラジル連邦共和国サンパウロ州にあるサントス港第14埠頭に接岸したのが1908年(明治41年)6月18日であり、この年から110周年を迎えるのを記念して、サンパウロ市内にある「サンパウロ・エキスポエキシビジョン&コンベンションセンター」において「ブラジル日本移民110周年記念祭典」が開催された。この祭典は、日本人移民同士の「勝ち組・負け組」の抗争からの脱却と再統合の契機となったブラジル日本移民50周年の流れをくむもので、7回目の祭典となる。

最初に、日本から出席した 17 県の知事又は議長等及び、本県を代表して祭典の壇上に上がった福間副議長の紹介があり、盛大な歓声により迎えられた。次に大きな拍手が鳴り響く中で秋篠宮眞子内親王殿下を壇上に迎えた後、ブラジル連邦共和国の各州旗と日本の各都道府県旗の入場があり、大変華やいだ雰囲気の中で主催者挨拶や来賓の祝辞等が行われた。



式典壇上



挨拶する秋篠宮眞子内親王殿下

この中で、呉屋春美祭典委員長は「日本移民の貢献があったからこそ、今のサンパウロの発展がある」と自分たち日系人のこれまでの活躍に確固たる自信と誇りを示し、「先人の残してくれた最大の宝は、日本文化の継承・普及である」と自らのルーツを大切にし、今後もこれを守り継続・普及していくことを誓われた。また、ブラジル都道府県人会連合会の山田康夫会長が述べられた「先人のこれまでの努力に感謝」、「一生懸命に働く者全てに応えてくれるブラジル社会に感謝し、ブラジル社会の今後の発展を確信する」との言葉から、祖国ブラジルを敬愛する心があるからこそ、日本を思う心も育まれるものと感じた。そして、日本を代表して眞子内親王殿下から「日本移民を暖かく受け入れてくれたブラジル社会に感謝し、またブラジル社会の発展に貢献してきた日本移民の皆さまに敬意を表す。また、こうした歴史が未来を担う子どもたちに引き継がれることを願う」との挨拶があり、労働力不足解消が喫緊の課題である我が国・県においても、近隣諸国等から労働力を受け入れた場合には相互に感謝の言葉が語れるよう、日伯の歴史を参考にしながら建設的な関係を築いていかなければならないと感じた。

この祭典の前後には、在ブラジルの各都道府県人会が中心となって沖縄県のエイサーや徳島県の阿波踊りなど各都道府県の伝統芸能が披露されたが、本県のものとして「しゃんしゃん傘踊り（ブラジルでは「鳥取傘踊り」の名称で定着。）」が披露され、これの踊り手にブラジル鳥取県人会会員や大志万学園の生徒のほか、本県訪問団（県議会、県執行部、あすなる会、鳥取ブラジル友好協会）も参加し、総勢約 170 名が鈴の音を響かせ会場を盛り上げた。



会場でしゃんしゃん傘踊りを披露

(6) プロミソン上塚植民地100周年記念式典出席【22日15:00～】

サンパウロ州プロミソン市は、サンパウロ市から内陸に約500km弱入ったところにある。「ブラジル移民の父」と称される上塚周平氏は民間移民事業者の職員として1908年に笠戸丸で訪伯したが、劣悪な条件下で労働者として農業に従事する日本人移民の処遇を見かね、これを改善するために自営の植民地開拓を目指した。この上塚氏が開いた植民地に入植が始まって100周年を迎えることを記念して開催されたのがこの度の式典である。見渡す限り農地や牧草地が続く広大な開拓地にある「上塚周平運動場（上塚周平公園）」に特設会場が設けられ、報道によれば、約4万人のプロミソン市民の半数にあたる約2万人がこの会場を訪れ、式典を祝ったとのことである。

当日は、特設会場に本県訪問団のための観覧ブースを準備していただくなど、心温まる歓迎をしていただいた。式典では壇上からの祝賀は叶わなかったものの、式典開始前にブラジル鳥取県人会の方とともに「しゃんしゃん傘踊り」を現地の皆さんに披露し、楽しんでいただくことができた。



ブラジル鳥取県人会の皆さんと



眞子内親王殿下の登壇を待つ会場

秋篠宮眞子内親王殿下をお迎えしての式典であったが、皇族を初めてプロミソンにお迎えするということもあり、眞子内親王殿下が入場されると会場の盛り上がりは最高潮に達し、会場の日本に対する好意がひしひしと伝わってきた。報道によれば、プロミソンのマノエル市長からは「式典は最大の事業となったが、どれだけ大きな事業

も日系人のブラジルとプロミソンへの貢献に匹敵するものではない」と最大級の賞賛をいただいたということであるが、会場の日系人の方々からは、その賞賛が決して過大ではないという自信と誇りを感じることができた。

(7) ミランドポリス市長、市議会議長表敬訪問【23日9:00～】

ミランドポリス市は、サンパウロ市から西北西に約 600 km 内陸に入った、パラナ川に近い標高 400 ～ 500 m の緩やかな高原地帯に所在し、牧場や農園に囲まれた人口約 29,000 人の地方都市である。行政区には、第二アリアンサ鳥取村を含むアリアンサ全区が含まれており、企業進出があった縁で富山県高岡市と 1974 年に姉妹提携を締結している。



市長室での意見交換



市庁舎正面玄関で

このミランドポリス市及び市議会を訪問し、ミランドポリスの現況等について意見を交わした。なお、この訪問には第二アリアンサ鳥取村の役員等の方にも同席していただいた他、第一アリアンサの今本マリアンさんに通訳として活躍していただいた。

最初にヘジーナ・ムスタファ市長を表敬したが、市長から将来に渡り市の客人として処遇する旨の証明書の交付を受けた後、記念品交換をして意見交換を行った。その主な内容は次のとおり。

- ①初等教育から高等教育まで、例えば市外の大学へ通うための経費を市が負担するなど教育に相当の力を注いでいるが、就労場所が限られており、本県同様、若者の市への定着や回帰に期待が持てない状況。
- ②医療費は全額市が負担し、受診者の負担はなし。ただし、市の認定医療機関数が不足しており、治療開始までに相当の期間待たされる（後日、ブラジル鳥取県人会本橋名誉会長からは、高所得者は民間医療機関で速やかな受診が可能で、こうした格差是正が課題という話あり。）。
- ③市制記念日には盆踊りが行われ、日本料理店がバーベキュー店より多いなど、日本文化に触れる機会がある。
- ④主要産業の一つである農業は、日系人に負うところが大きい。新品種を出すのも日系人で市民の尊敬を集めている。

市長表敬後は、ルシアーノ・ベルサーニ市議会議員長を表敬し、記念品交換を経て意見交換を行った。その主な内容は次のとおり。



議場で意見交換



ベルサーニ議長と共に

①ミランドポリス市議会議員定数は9人であるが、この定数に対して前回は96人の立候補があり、この激戦の中で最も票を集めたのが第三アリアンサ出身の日系人（アベ議員）であった。

②ベルサーニ議長からも市長と同様に農業分野での日系人の貢献を高く評価しているとの発言があった。

こうして市長や議長から話を伺うと、先人は様々な工夫を重ねながらミランドポリスの農業分野をリードしてきたことや、このことを誇りとしながら、今でも技や伝統が後世に脈々と受け継がれていると感じられた。

市長、議長表敬後は市長主催の歓迎交流会が市内のレストランに会場を移して催され、アリアンサへの支援と日伯の交流促進に向けて、引き続き共に取り組んでいくことを確認し合った。



ムスタファ市長主催の歓迎交流会

(8) 第二アリアンサ鳥取村訪問【23日14:30～】

鳥取村の建設は、1926年に当時の鳥取県海外協会がミランドポリス市郊外に3千町歩の土地を購入したのが始まりである。そして、1908年の最初の日本人移民は短

期的な稼ぎを目的として渡伯したものの収益が上がらなかったことから、1920年代から渡伯方針を変更して自立的な農業経営を目指して日本人集団地を建設するようになったが、アリアンサ建設もこの頃の一つである。

1927年には、今の岩美町、当時の大岩村長の橋浦昌雄（はしうら まさお）氏が移民団を率い、5家族26名の方々による第二アリアンサ鳥取村への本格的な移住が始まり、現在は約30世帯約140人が生活している。

鳥取村訪問に先立ち、最初に第一アリアンサ内にある「北原地価造頒得公園」に立ち寄り、アリアンサ創設の中心となった永田稗（ながた しげし）氏を偲んで建立された碑文「珈琲より人をつくれ」などを見学した。ブラジルへの定着に向けて、経済的な成功よりも人間的素養の向上に重点を置くとの崇高な理念が掲げられ、アリアンサはその崇高な理念の下で建設されたということを知り、深い感銘を受けた。



永田稗氏の記念碑(上)

裏面(左)に「珈琲よりも…」が刻まれている



鳥取村では、村が設置した日本語学校において、足羽英樹教育次長による書道の特別授業が行われた。この日本語学校は正式な学校ではなく村の私塾的機関で、3歳児から高校生までの17人が7つのクラスに別れ、放課後に1クラス週2回の割合で日本語を勉強している。1994年以降、この学校の日本語教師を本県から派遣し、鳥取村の日本語指導や日本文化の伝達等に活躍してもらっている。

今回の特別授業は、筆を使って「人」と「信」という字を書いてもらうものであったが、日本文化を伝えるだけでなく、先に感銘を受けた「珈琲より人をつくれ」の理念を分かりやすく伝える内容で、書き上げた後の子どもたちの誇らしくもはにかんだ笑顔を見ると、先人がなぜ人を大切にしたいのかということ子どもたちなりに理解し、この体験を将来の貴重な財産としてもらえたように感じた。

この後、村の共同墓地で先人の冥福を祈り、また、村周辺のサトウキビ畑や牧草地を視察して回った。今では、原生林は広大な敷地の一角に記念碑的に僅かに残るのみで、見渡す限り続く広大な農地を見て、どう原生林を切り開いていったのか想像することは非常に困難であった。



足羽次長の特別授業



出来た作品を掲げる生徒たち

この日の夜は、鳥取村主催の歓迎夕食会に招待された。

福間副議長が鳥取訪問団を代表して挨拶し、「子どもたちの日本語学校での学ぶ姿を見て、ブラジルまでの 30 時間の距離は吹き飛び、日本との強い絆を確認することができた。この絆を鳥取に帰っても大きく育てていく努力を約束する」と述べ、鳥取村の熱い歓迎に応えた。また、来賓のミランドポリス市長からは「先人が困難を乗り越えて日本とブラジルの文化を融合し今日に至っていることをうれしく思う。鳥取村はミランドポリスの欠かすことのできない存在。ミランドポリス市民の日本に対する友愛の気持ちを、是非鳥取県民に伝えて欲しい」という暖かい言葉をいただいた。

夕食会には村を挙げて家庭料理を準備していただいていたが、筑前煮や巻き寿司など日本料理の伝統がしっかりと受け継がれていた。また、会の途中で、日本語学校派遣の井上幹朗（いのうえ みきお）先生の三味線の伴奏により、子どもたちの「ふるさと」の合唱が披露されるなど、大変楽しい時間を過ごすことができた。



日本料理の伝統を受け継ぐ料理の数々



子どもたちから歌のプレゼント



鳥取村の役員の方々との語らい



若い世代ともしっかりと交流

日本語の継承ということであるが、今の子どもたちの親世代にあたる3世の中には日本語で話すことができない方もあるなど、日本語能力は2世に比べてかなり厳しい状況のようであり、このままでは村から日本語がなくなってしまうという危機感もあるようである。

井上先生は、村の方が運転する車に同乗させてもらって食糧や日用品の買い出しに行っており、相当に行動が制約される中で活動されている。公用車を配置するなどして先生の機動力が確保できれば、日本語学校に通うことができない家庭の子たちにも日本語を学ぶ機会が生じたり、より幅広く村の活動に参加して日本文化を伝えることも可能となるだろう。日本語教師の機動力確保は、喫緊の課題として対処すべきであると感じた。



日本語学校 井上先生

また、日本において日本語や日本文化を体験したことがない世代となり、残そうとしている日本文化が正統なものなのかどうかも分からないということもある中で、日本語や日本文化を学ぼうという意欲や動機付けが弱くなりつつあるのかもしれない。日本語学校での学習の節目々々に、日本からの鉛筆や消しゴムなどの文房具を子どもたちにプレゼントしたり、日本語学校で一定水準の能力を身につけた子どもたちを本県に招待し、学んだ日本語を使ってみたり、実際の文化を肌で感じたりする機会を確保することも検討する必要があるのではないかと感じた。



鳥取村の皆さんに暖かく迎えていただきました

(9) 大志万学院（松柏学園）訪問【24日10:30～】

大志万学院は1993年にブラジル教育局の認可を受けて設立された正規の私立学校である。30年位前から日系人の間で日本語教育よりも英語教育に重点が置かれるようになる中で、日本語教育が疎かになると日本文化の伝承も疎かになるとの危機感から、日本語を第1外国語として学ぶ学校として設立された。松柏学園は日本語学校として1952年に設立されたが、現在は大志万学院を卒業した高校生のうちで更に日本語を学びたいという生徒のための日本語学習の場とされており、学校として外部から

の受入は行っていない。

川村真理子校長は、「東洋（日本）と西洋（ブラジル）を代表する人間がより豊かな人生を送れる」という信念を持っておられ、日本人のよい面とブラジル人のよい面の両面を引き継いだ人材を育てていきたいとの方針で学校運営を行っている。

今回の訪問は学校が冬休みの時期であったが、生徒4人が訪問団の歓迎のためにかかけつけ、生徒の手によって和風に飾り付けられた菓子が、その生徒達により訪問団一人一人に配膳されたが、こうした配慮も「東洋と西洋を代表する人間の育成」の実践であり、生きた教育が行われていると訪問団一同深い感銘を受けた。



生徒たちからのもてなし



生徒が飾り付けたお菓子

大志万学院には鳥取県に縁がある生徒がいるわけではないが、この度の日本移民110周年記念祭典でのしゃんしゃん傘踊りに約40名の生徒が参加した。これも学校の教育方針の一つである「心と感謝」を表したもので、学校の55日間の海外研修の際に訪れる鳥取県への感謝の気持ちを表すために、ブラジル鳥取県人会からの参加依頼に生徒自身が自主的に応諾して参加したものとすることである。

今後、日伯の交流を促進していく上で、こうした両国の文化を身に付けた人材は有益であり、今後も大志万学院の生徒の本県への研修受入に努めることはもちろんのこと、大志万学院は鳥取県からの研修生の受入をいつでも歓迎すると言ってくれており、本県からも生徒を送り出してグローバルな人材の育成に努めることも重要である。

なお、サンパウロにおいて日本語を第1外国語とする学校は大志万学園のみであるが、ドイツ、イタリア、スペインなど多くの移民を送り込んだ国の言語を第1外国語とする学校は、その国からの補助金を受けて多数設置されているとのこと。これらの補助金交付国は、国策として自国の言語や文化の普及に力を入れている。混血が進み日系人としてのアイデンティティが失われてしまう前に、他国と同様、我が国も国策として日本語や日本文化の普及を図るよう日本政府に対して働きかけることも必要ではないだろうか。

(10) ジャパン・ハウス視察【24日15:30～】

ジャパン・ハウスは戦略的対外発信の強化に向けた取組の一環として日本政府により2017年5月に設置されたもので、ブラジル・サンパウロが世界で最初の開設となった。日本に関する様々な情報がまとめて入手できるワンストップ・サービスを提供するとともに、カフェ・レストラン、アンテナショップ等を設置し、民間の活力、地

方の魅力なども積極的に活用したオールジャパンでの発信を実現し、専門家の知見を活用しつつ、現地の人々が「知りたい日本」を発信することをコンセプトとした新たな発信拠点で、これまで日本への関心が必ずしも高くなかった人々を含めた幅広い層に対し多様な魅力を発信しながら親日派・知日派の裾野を拡大していくことが目的とされている。

今回訪問した当日は平日にも関わらず多くの来客で賑わっており、開設当初の目標集客数 15 万人に対して 80 万人の実績があったということにもうなづけるとともに、ブラジルにおける日本文化に対する関心の高さが伺われた。

ジャパン・ハウス 1 階には無印良品の商品が特集として展示販売され、2 階には地方の民芸品が展示販売されていた。これらの商品の価格設定は日本での価格と同等かそれ以上の印象を受けるものであったが、それでもよく売れているとのことであった。

ジャパン・ハウスの特別顧問である平田・アンジェラ・多美子氏は、祖母にあたる方が本県の淀江町の出身ということで、訪問団に親しく接していただいた。今後の本県とブラジルとの交流促進において、平田アンジェラ氏のお力添えをいただきながら、ブラジルにおける新たな情報発信拠点として定着しつつあるジャパン・ハウスとの連携を図り、本県の情報を発信していくことも検討すべきであろうと感じた。



館内を案内する平田氏（中央の女性）



伝統工芸 風呂敷

(11) ブラジル鳥取県人会創立 65 周年記念式典出席【24日18:00～】

鳥取県からブラジルへ移住した方の数は、約 2300 名で、戦前に約 2000 名、戦後に約 300 名といわれている。そしてブラジル鳥取県人会は、1952 年（昭和 27 年）の鳥取大火に際し、未曾有の災害に対する救援金を集める運動がきっかけとなり、鈴木栄蔵（すずき えいぞう）氏、徳尾恒壽（とくお つねとし）氏の尽力により設立された。65 周年は前年が該当年になるが、今年のブラジル日本移民 110 周年に合わせて記念式典が開催されたもので、これに本県訪問団は参加した。

記念式典には、約 150 人のブラジル鳥取県人会会員が出席した。日伯両国の国歌斉唱で始まり、先没者への黙祷の後、福間副議長、岡村統轄監等が挨拶を行った。



ブラジルー鳥取交流センター

最初に岡村統轄監の代読によって平井知事からの「本橋名誉会長にはブラジル社会での日系人の地位向上にご尽力いただき、山添会長には県費留学生受入制度等の事業推進にご尽力いただいている。そして千田、末長、大原各副会長には3世、4世といった若い世代へ本県の文化や伝統の伝承に尽力いただいている」との祝意を表した。そして、福間副議長から「自分の故郷やルーツに強い誇りを持つということが、これほど人を輝かせ、生き活きとさせるものなのかと、改めてこのことの重要性や素晴らしさを認識した」「鳥取の輝きに更に磨きをかけ、ブラジルがより一層身近な国となるように、人的交流だけにとどまらず経済的交流にも目を向けて参りたい」との祝辞を述べた。

山添源二ブラジル鳥取県人会長からは、「母県の支援と代々の県人会長の努力により県人会は日本文化の拠点となっている。このこのことに感謝し、また、引き続きの支援をお願いしたい」との謝辞が述べられた。



山添会長による開会挨拶



県人会役員によるケーキカット

次に、式典の会場をお借りして、ブラジル鳥取県人会の80才以上となられた会員の方の功績をたたえるため、県からこの方々の表彰をさせていただくとともに、ブラジルと鳥取県の架け橋として尽力されているブラジル鳥取県人会やその他日系三団体に対して激励金等を贈呈した。これに対して、ブラジル鳥取県人会からも鳥取県訪問団に対して記念品が贈呈された。

この後、元県費留学生・技術研修生を代表して、宮本アドリアーナ優美氏から挨拶があり、「鳥取県において日本人の仕事の仕方を学び、先祖と同じ景色を見られたことはかけがえのない貴重な経験であった」と述べた。

鳥取県民歌「わきあがる力」を全員で合唱して記念式典は閉会となったが、引き続き祝宴が開催され、内田博長議員は3代目県人会長が同郷の方であることを紹介して祝辞を述べ、藤井一博議員はポルトガル語を交えながら若い世代を代表して交流促進に取り組む旨の決意を祝辞として述べた。この後、鳥取県訪問団やブラジル鳥取県人会の皆さんによる傘踊り、全員での「ふるさと」合唱など交え、大いに盛り上がったところで会はお開きとなった。

この記念式典及び祝宴を通して強く感じられたのは、山添会長の挨拶にもあったように、ブラジル鳥取県人会は単なる同郷の集まりではなく、世代を重ねる毎に日系人

としてのアイデンティティーが希薄化していく中で、日系人であるという自己認識を再確認し、そして、高める場として大変重要な組織であるということである。若い世代である宮本アドリアーナ優美氏が述べた「先祖と同じ景色を見られたことはかけがえのない貴重な経験」は、県人会を通じて行っている交流事業があったればこそその経験であり、こうした経験が日系人という自己認識を確固たるものにし、また、日本とのつながりを「誇り」に醸成していくのだろうと感じたところである。

現在のブラジルの日系社会は3世、4世の時代に入っているが、在サンパウロ日本領事館のホームページによれば、2世の混血状況が6%であるのに対して4世になると63%に跳ね上がっており、この状況に鑑みれば遠からず日系人が何者かということも分からなくなる日が来るかもしれない。こうした未来を回避するためにも、県議会として今後も交流事業を推進していくことは大変重要であると改めて確認することができた。



記念品等の交換（民間団から県人会へ）



宮本アドリアーナ優美氏の挨拶



本橋名誉会長による祝宴の乾杯



鳥取県訪問団による傘踊り披露

(12) ブラジル三井住友銀行訪問【25日9:00～】

会長が本県出身の株式会社武蔵野はブラジルからの労働者を多く受け入れており、その関係から、ブラジル三井住友銀行をこの度の企業訪問先の一つとして紹介していただいた。ブラジルの経済情勢の確認等を行うためにはよい機会であり、ここを訪問して栗原裕二社長、金村洋平企業金融第一部長と意見交換を行った。その概要は次のとおりである。

- ① ブラジルの景気は2014年以降低迷。よかった頃の60%位まで需要は減少し、それまでであった日系企業の進出もない状況。最も日系企業が進出した昭和40

年代の頃はサンパウロの日本人学校には 2000 人の生徒が在籍していたというが、今は 200 人程度で、日系企業よりも欧米企業の方が多く状況となっている。

- ② ブラジルの物価は日本と余り変わらないが、貧富の差がアメリカより大きく、低所得者の所得は相当に低い。トヨタカローラは日本では大衆車であるが、ブラジルで現地生産されているものは労働者の人件費が低い訳でもないのに、1台 350 万円程度の価格帯で販売される高級車である。ホンダや日産も同様に、高価格の日本車のシェアはそれほど高くはない。
- ③ ブラジルでは、まだ国民の環境意識は低く、「エコ」を前面に売り出しているダイキン工業もマーケットとしては厳しい状況。中国や韓国製の「安い」を前面に出したもののの方が売れる。
- ④ 日系企業なので、日系社会とのつながりはそこそこにあるが、仕事でというよりも日本人として行事に参加するといった感じである。
- ⑤ ブラジルの日系人は昭和の心を大切にされている感じを受ける。ブラジルでは窃盗や横領など犯罪が多いが、日系人は一切そういうことをしない、誠実であるという評価が定着しており、日本人に対するイメージの良さは世界でも指折りである。中国や韓国の方に対する対応とは明らかに違っており、色々な面で助けられている。

昭和 40 年代には多くの日系企業がブラジルにおいて活動していたが、景気低迷等により多くが撤退し、その後はかつてのような活動には至っていない。先人が今日まで培ってきた「誠実」という評価によって色々な面で助けられているということであるが、自動車、スチール製造過程での偽装やデータ改ざん、直近では省庁等行政の障がい者水増し雇用など、我が国においても「誠実」という評価を裏切る事件が頻発するようになった。「誠実」であることが当たり前の社会であるか改めて点検し、今後のブラジルでの評価を維持しながら経済的交流を深めていかなければならない。



意見交換の様子



栗原社長（右）と金村部長（左）

(13) T G K社訪問【25日10:15～】

T G K社は旅行業や人材派遣業等を行っている会社で、株式会社武蔵野はブラジルからの労働者を当該企業を通じて受け入れており、この関係からブラジル三井住友銀行の場合と同様に紹介を受け、労働者の派遣事情の確認等を行うため訪問したもの。

遠山景雅エドワード部長、荒垣厚則コンサルタントと意見交換を行ったが、その概要は次のとおりである。

- ① リオオリンピックやサッカーワールドカップの会場を日本人観光客が掃除をして帰っていく姿を見て、他の国民では見られない行動で、本当にありがたく思った。
- ② (株)武蔵野で働くブラジル人は約 700 名いるが、TGK で紹介させてもらった。日本で働くなら、武蔵野か村田製作所かという評判が日系人の間では定着している。特に、武蔵野はセブン-イレブンとのつながりがあるため賃金や福利厚生等が一番よいという評判があり、武蔵野で働きたいという希望者が多い。紹介する側としても、武蔵野は日系人を大事にしているという評判もあるので助かる。
- ③ 日本においては武蔵野を含め約 80 社程度に紹介しており、紹介者数は毎月 100 人以上になる。働きに出るにあたっては、「家族と共に」日本に行くパターンが一番多い。4 世の代になると、「18 才～ 30 才で独身」であることなどの条件が付き、就労制度としては難しい。
- ④ 最近の新聞や雑誌では、「ブラジルの経済や治安がよくないという社会的事情を背景に、日本へ働きに行く日系人が増えている」という記事がよく掲載されている。
- ⑤ 日本に働きに出るにあたり、かつては短期間働いて国に帰るという考え方であったが、今はブラジルに帰らず、日本にできるだけ住み続けたいと考えている方が多い。
- ⑥ 日本語が十分に話せない場合の対応について、武蔵野の場合はその方の世話をする専任の担当者がつく。例えば、病気になった場合は病院に連れて行き、本人に代わって病院等への手続きを行うなど、日本語ができないことでの不便がないようにしていると聞いている。

ブラジルの経済の低迷や治安の悪化などを背景に、日本で働きたい、そして日本に永住したいという日系人の方が増えているということである。本県では、介護職の人手不足を解消するためにベトナムからの労働者の受入を前提としているが、ブラジルからの受入も視野に入れ、永住を前提とした日本語教育制度の仕組みや就労環境整備なども検討してはどうかと感じた。



意見交換の様子



遠山部長（右）と荒垣コンサルタント（左）